大分市歴史資料館 ニュース

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

vol. 89
2009.12.5

新指定文化財 Cultural Properties

伝岩屋遺跡出土銅戈・石戈 ～大分市指定有形文化財～

平成20年12月4日、伝岩屋遺跡出土の銅戈・石戈が大分市の有形文化財(考古資料)に指定されました。

銅戈は、昭和5(1930)年10月頃に発見されたといい、昭和7年発行の『豊府古蹟研究 第7冊』の中で「…先年現公民学校敷地(横穴の西南方)地均しの際、一個の銅剣を発掘し、公民学校に保存している。…」とあります。公民学校敷地は現在の滝尾中学校敷地にあたり、岩屋遺跡から出土したと考えられます。銅戈は、脊に鎬が通らないタイプの細形銅戈に分類され、弥生時代中期前半頃(およそ2100年前)のものと考えられます。全体的に細身でわが国における初期の鋳造品と考えられ、極めて重要な資料と言えます。細形武器は北部九州を中心に分布していますが、いち早く大分平野に流入していることは重要と言えます。

伝岩屋遺跡出土銅戈　大分市教育委員会

石戈は、昭和35(1960)年頃、滝尾中学校の講堂兼体育館建設工事の際に採集されたといいます。この石戈も岩屋遺跡からの出土と考えられます。丁寧な作りの優品で、本来は全長が20cm近くあったものと推測されます。刃先が長くなる典型的なタイプで、石材は粘板岩か頁岩と考えられ、遠賀川流域で製作された可能性があります。このタイプは普及期の石戈で、北部九州から各地に広がることが知られていますが、大分市域内では唯一の出土であり、貴重な資料ということができます。

伝岩屋遺跡出土石戈　個人蔵／大分市歴史資料館 寄託

以上、銅戈・石戈は、発見の経緯は異なりますが、同じ滝尾中学校敷地からの出土で、ともに岩屋遺跡出土品と考えられます。どちらも学術的価値が高く、大分市の弥生文化を考える上できわめて重要なものと言え、今回大分市の有形文化財に指定されました。現在、これらの資料は常設展示「弥生のコーナー」にて常時展示していますので、是非一度ご覧いただければと思います。

戈とは・・

鎌に似たもので、長い木製などの柄に直角に刃を取り付けた武器です。日本の銅戈は中国の戦国時代頃のものが、朝鮮半島を経由して弥生時代前期の終わり頃(およそ2200年前)に伝わりました。日本では北部九州で製作されるようになり、実用の武器から祭器へと変わっていき、用途の変化とともに、形は細身のものから幅が広くなっていきます。

インフォメーション Information

テーマ展解説講座

内容　講座室でテーマ展「地図と写真でたどる大分の近代史」について、スライドなどで解説します。

日時　12月13日(日)　14時～15時30分

講師　大分市歴史資料館職員

参加費　講座は無料です。
※展示をご覧になる場合は観覧料が必要です。

ミュージアム・シアター

実施日　〔●大人向け ◎子ども向け〕

12月13日(日)　●地図にみる大分の今と昔
◎まんが日本昔ばなし
「さるかに合戦」「たのきゅう」

1月24日(日)　●東京　－大江戸の春－
◎まんが日本昔ばなし
「桃太郎」「豆つぶころころ」

時間　13時～14時

料金　無料　※事前の申し込みは必要ありません。

ふれあい歴史体験講座

定員　各回70名(先着順)

時間　午前の部　9時30分～(約2時間)
午後の部　14時00分～(約2時間)

実施日	内容	時間	材料費	受付開始日
12月26日(土)	和凧作り	午前・午後	300円	12月5日(土)
1月23日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	1月 6 日(水)
2月13日(土)	管玉・丸玉作り	午前のみ	260円	1月22日(金)

応募　上記の受付開始日より、電話にて応募ください。
(大分市歴史資料館:097-549-0880)

ふるさとの歴史再発見講座：古文書のコース

開催期間　1月9・16・30日の土曜日
2・3月の第1～3土曜日 (計9回)

時間　毎回14時～15時30分

対象　高校生以上　**定員**　70名　**参加費**　300円

応募　往復はがき(1人1枚)に住所、氏名、電話番号、講座名、参加希望の旨を記入し、12月21日(消印有効)までに歴史資料館までお申し込みください。
※多数の場合は抽選となります。

利用案内

■開館時間　9時から17時(入館は16時30分まで)
■休館日　月曜日　祝日の場合は開館
但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日
祝日の翌日　但し土・日曜の場合は開館
年末年始　12月28日～1月4日
※平成22年は1月6日より開館

■観覧料　大人200円(団体150円)　高校生100円(団体50円)
※団体は20名以上、小中学生は無料
※特別展開催中は別料金となる場合があります。
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。
◎入館時に受付で手帳を提示してください。

■交通機関
・JR久大本線　豊後国分駅下車 徒歩2分
・大分バス[国分新町ゆき]
歴史資料館入口下車 徒歩5分
・大分自動車道
大分I.C・光吉I.Cよりともに約15分

発行日：平成21年12月5日
発　行：大分市歴史資料館　〒870-0864　大分市大字国分960-1　TEL097-549-0880
※ホームページ　http://www.city.oita.oita.jp/(大分市ホームページ)の「施設ガイド」も併せてご覧下さい。

大分市歴史資料館　テーマ展示Ⅲ

地図と写真でたどる大分の近代史

会期：12月5日（土）～ 1月31日（日）

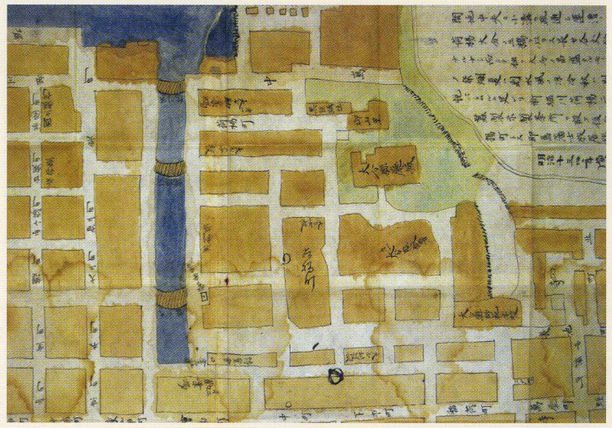
明治新政府が行った廃藩置県や県の統廃合を経て、明治4年（1871）11月に大分県が誕生しました。旧府内城に県庁が置かれ、以来この城下町を核に現在の県都大分市が築かれていきます。明治33年（1900）九州で初めて大分に路面電車が走り、同44年には大分駅も開業し門司―大分間を蒸気機関車が運行するようになりました。また、大正4年（1915）に3,000トン級の大型船の碇泊可能な大分港（現在の西大分港）が完成し、陸・海の交通機関の整備がすすむと、大分市は東九州における重要な拠点都市として大きく発展をみることになりました。

本テーマ展示では、こうした大分市の明治から昭和までの歴史を地図や写真でたどります。

大分町から大分市へ

県庁所在地となった旧府内城下町は、明治5年（1872）の大区小区制の施行にともない、荷揚・松末・府内・笠和・同慈寺・南勢家・千手堂の7町からなる「第3大区第1小区」の行政区として位置づけられました。明治8年（1875）の大規模な町・村の統廃合によって上記7町は「大分町」として一つにまとめられ、同11年（1878）大区小区制の廃止とともに、正式に大分町が発足しました。

その後、明治40年（1907）西大分町・荏隈村・豊府村との合併を遂げて人口2万5971人をかかえることになった大分町は同44年念願の市制を敷き、九州では10番目、全国で61番目の市として大分市が誕生しました。

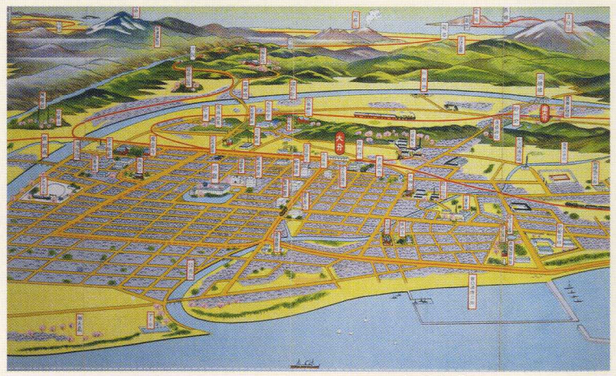


大分町図（明治13・14年頃）

旧府内城下の中堀と外堀の大半が埋めたてられ、残された中堀の西側部分には北から堀川橋・荷揚橋・大分橋の3つの橋が架けられている。旧府内城に県庁が置かれ、その正門を出た南東の位置には新時代の県の教育を担った大分県師範学校が建てられている。図中の解説によれば、師範学校は「宏麗頗ル盛観ヲ極」めた「洋館」づくりとあり、新しい時代の到来を感じさせる建物が次第に街の中に建てられていく様子がみてとれる。

大分に路面電車・蒸気機関車が走る

明治33年（1900）5月、文明開化の象徴ともいうべき路面電車が、九州で初めて大分―別府間を走りました。後に“別大電車”の名前で親しまれたこの電車は、当初大分堀川―別府浜脇の10.6kmの間を約1時間で走行。その後、明治35年に南新地（現在の竹町入口）まで、大正7年（1918）には大分駅まで延長され、さらに昭和17年（1942）には別府亀川駅まで延長されました。電車の走る南新地―大分駅の通りは「電車通り」（現在の中央通り）と名付けられ、別大電車は大分の街の風物の一つになっていきました。



昭和9年（1934）　大分市鳥瞰図

港湾や鉄道の交通網の整備がすすみ、九州の陸海の拠点として発展する大分市の様子が描かれている。

明治5年（1872）東京の新橋―横浜間を初めて蒸気機関車が走って以来、その輸送力などの利便性から全国で鉄道建設がすすめられました。明治28年（1895）九州の小倉―行橋間に、同30年（1897）行橋―長洲間に鉄道が敷かれました。その後、鉄道の延長工事がすすめられ、明治44年（1911）豊州線（現在の日豊本線）が大分市まで開通しました。大正3年（1914）に大分－中判田間の犬飼線（現在の豊肥本線）が、翌大正4年には大分―小野屋間の大湯線（現在の久大本線）も開通し、大分を拠点に鉄道網が整備されていきました。また、同年大分港も新しく完成し、交通の要衝として大分市はその地位を高めていきました。

別大道路を走る路面電車と馬車（明治末～大正初期）

大分―別府間を結ぶ主要な交通機関となった路面電車も、のちにバスや自動車の利用に押されて、昭和47年（1972）に廃止された。

明治44年（1911）開業当初の大分駅と蒸気機関車

駅に停車する蒸気機関車は、明治27年（1894）にイギリスから輸入された「1530形蒸気機関車」。主に鉄道建設用として利用された。

戦災からの復興

昭和20年（1945）7月16日の夜半から始まったアメリカ軍B29爆撃機の大空襲によって、市の中心部は一夜にして焦土と化しました。8月15日に終戦を迎え、これを機に大分市ではこれまでにない思い切った復興事業が行われました。市街地のメイン道路の「中央通り」と「昭和通り」はそれまでの15mから30mに拡幅され、新たに大分駅前に同じく30m幅の「産業通り」が通されました。また、街の中に市民の憩いの場となる「若草公園」・「ジャングル公園」・「遊歩公園」の公園が新設されました。こうした独創的な事業と急速な復興が認められ、昭和25年（1950）7月に大分市は全国115の戦災都市の中から岐阜市・松山市とともに復興のモデル都市に指定されました。

昭和30年代に入り、県民所得と雇用の増大を図る大分県は、大分・鶴崎臨海工業地帯の造成を計画、昭和34年（1959）から同地域の海岸部の埋め立て工事を開始しました。県の強い後押しのもと、昭和38年（1963）鶴崎市・大南町・大分町・大在村・坂ノ市の市町村との合併を遂げた大分市は、翌年、国がすすめる“新産業都市”の指定をうけ、工業都市へと大きく様変わりしていきました。

昭和25年（1950）　大分市鳥瞰図

「大分駅から浜町の海が見えた」といわれた昭和20年の大空襲の被災から、みごとに復興した市街地の様子が描かれている。多くの建物が再建され、中央通り・昭和通りのメイン道路は拡幅され、新たに産業通りも通されている。

昭和37年（1962）頃の遊歩公園　『大分市観光案内』より

表紙紹介

大正14年（1925）当時の大分市を鳥の目線で捉えてあらわした地図。主要な公共施設や学校・病院・工場・神社などの建物が立体的に図示され、これらの位置関係を通して市街地全体の状況が分かりやすく描かれている。裏には「大分市著名銀行会社商店紹介」として詳細な建物図も掲載されている。